



事故なき社会 研究担当取締役
九州大学名誉教授 松永 勝也氏

視点で捉えなければならぬ。しかし、徐行状態では、進行方向の安全確認が優先され、交差方向の安全

た場合には見逃しが発生 一五秒の徐行速度である。仮に接近車両に気が付いた場合でも、時速約

停止することになる。交差道路を相手の車両がその停止距離よりも近い所を接近してきていれば、衝突を回避できない。

全確認が望ましい。着実に停まる習慣を付ける

出会い頭の衝突事故を防ぐ

第4回

衝突など自動車の運転 確実な停止を行っている事故防止のためには、停車は2%以下で、それ以外距離よりも長い車間距離外の所での停止を含めて離(または、進行方向空も約5%の人しか実行し間距離)を保持して走行していない。ほとんどの人すべきことは、繰り返すは徐行状態での安全確認述べた。だが、事故が発生しない

道路の交差点部分は、場合が多いため、完全にここに至る前に停止距離より停止していかないにもかかりも長い空間を見通すことわらず実行していると思つていい。

徐行状態では 本当は危ない

点での出会い頭の衝突事故防止のためには、停止状態での安全確認が必要である。

一方、現実に停止線で 両を視野の中心部(認識)が、接近車両以外を捉え

2段階停止での安全確認

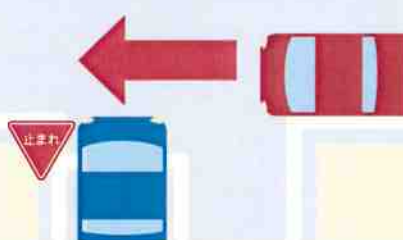
停止線での停止

近くを走行してくる自転車やバイクをやり過ごすための停止 (3-4秒)



2段階目の停止

近づいてくる自動車等の有無を確認するための停止 (4秒以上)



接近車両がないとわかっていても一時停止する習慣を形成

横から近づく 車両をスルー

道路の交差点では、まず一時停止線で停止し、近くを走行してくる自転車やバイクをやり過ごす。その後、小刻みに進行・停止を繰り返して、身を確認できる位置まで進行し、完全に停止した状態をブレーキを踏み続け、接近自動車やバイクの有無を確認する。

自動車が接近していればそのまま停止して衝突は回避できる。左右をそれぞれ約二秒間確認すると約四秒停止することになる。横断歩道を急いで通過しようとする自転車や歩行者との衝突を防止するためにも、横断歩道

手前での停止状態での安全確認が望ましい。着実に停まる習慣を付ける。安全確認の実行できるようになるには、安全確認の習慣形成が重要だ。そのためにも、一時停止しての確認を、安全と思える所でも繰り返して練習する必要があります。停止線での停止時間約三秒、停止線から左右を確認できる位置まで進行の前進に約三秒、左右を完全に停止した状態を確認できる所での約四秒、合わせて約十秒を要しても、目的地への到着が遅くなることはない。一時停止の安全確認を省略しても、どこかの停止信号で停止している間に、停止状態で安全確認を行った車に追いつかれ



まつなが・かつや 昭和16年生まれ、長崎県出身。47年九大院文学研究科博士課程修了。平成8年同大院システム情報科学研究科教授。24年事故なき社会研究担当取締役。26年安全運転推進協会代表理事。